

師、松村禎三先生（1）

闘病

2006年6月11日は忘れることが出来ない。学校の勤めを終えて東京駅で電車を待っている時であった。先生が倒れられて危ないと、塚本一実氏から電話が入ったのである。急遽虎ノ門病院に向ったが師は想像を絶する姿で横たわっておられた。意識はなく、手は浮腫んでぱんぱんに腫れ上がり、顔は黄色く紫に変色している所もあった。喉には酸素吸入の管が入り、点滴がいくつもぶら下がり、体は動けないように固く縛られておられた。面会時間は過ぎてはいたが付き添うことを願い、様態を聞いたところ、健康な人なら血液中の二酸化炭素の数値が40トール程のところ100をはるかに超える数値であり、普通なら生きていられない状態とのこと。今日中に80くらいにまでさがらないと危ないと言われた。祈り、励まし手をかざし3時間程たった頃だったろうか、80近くまで下がってきましたのでもう大丈夫です、という看護師さんの言葉は、天の声にも聞こえた。

それから半年近くの間、喉の管が抜けた、目を開かれた、手を握られた、声を出された、意識が戻った、酸素マスクがはずされた、点滴がなくなった、食事を取ることが出来るようになった、リハビリが始まった等々、一つ一つ薄紙をはがすように回復してゆかれた。

健常者とは異なり、師は20代の時に肺結核を患い清瀬の療養所に入れ、左の肺を7葉、右の肺を1葉取り除く手術を受けておられる。その後も心筋梗塞、直腸癌、脳梗塞も患った方である。このお身体で死線を彷徨われたにも関わらず、御年77歳にもなっておられながらも徐々に回復していかれるその生命力は、計り知れないものがありまさに驚異的とすら思えた。

師は血液中の二酸化炭素の数値が多くなってこられると、ボーッとされて眠くなられ、ひどい時には意識が混濁し、気を失う状態になられた。反対に良い数値の日には、鋭く射抜くような眼差しが戻り、世の趨勢や音楽界、とりわけ作曲界の行く末を憂うような話をよくなされた。「最近の若い作曲家の作品はどうだ」「どうして軽薄短小な音楽ばかりなのだ」「なんで裕は楽天的な希望を持ち続けることが出来るのか」等と問い詰められたこともあった。

ようやく11月に入り退院をされることになる。入院中より12月13日のサントリーで初演される、堤剛氏の委嘱作品についてはいつも心配をされていた。師が書いておられた大小様々なスケッチは7～8ページはあったであろうか、森崎偏陸さんが、先生がわからなくなれないようにまとめておいてくださった。

ご自宅に戻られた先生は、作曲の自室の愛用の安楽椅子に座られ、大層お幸せそうであった。しかし、寝る時には必ず酸素マスクを着用しなければ血液中の二酸化炭素の数値が上がるために、しっかりと頭から固定したマスクを用いて休まねければならなかった。具合の良い日にはピアノにしばらくは向われ、今まで書かれたところを弾かれたり書かれたりもされたが、マスクが苦しいためにはずされた日には、具合が悪く愛用の椅子に座ら

れたままピアノに近づこうともされることがなかった。日にちも迫り、ピアノでチェロのパートやピアノのパートを弾かせていただいたり、清書をさせていただいたりして完成させるお手伝いをさせていただいた。

佐治敬三氏の追憶のために書かれた「肖像」は、死を見つめ歩むかのような音とともに、不思議なリズムとチェロのピチカートによる章もあり、澄んだ美しい珠玉の作品となった。

また、2007年1月19日東京文化会館大ホール、別宮貞雄氏プロデュースで行われる東京都交響楽団第638回定期演奏会で行われる「管弦楽のための前奏曲」「ピアノ協奏曲第1番」は大層楽しみにしておられた。ピアノソロを弾かれた野平一郎氏は、師から事細かに多くの演奏の仕方や内面世界の話を聞かれたそうであった。

退院されて2～3ヶ月程たった頃だったのであろうか、再び入院されたという連絡が入った。ぼーっとされて意識がなくなられ、救急車で運ばれたということであった。休まれる時のマスクの使用をしっかりと着用しなければ、また入院をしなくてはなくなるということであった。マスクとのまさに闘いともいえる日々が延々と続くことになった。松村家の総がかりに加えて、森崎偏陸さんがほとんど毎日のように泊り込んでお世話をなさり、私も4～5日に一度はマスク番をさせていただくことになった。

入院され、お身体がお元気になられ退院も近づくと、「早く軽井沢に行って作曲をしたい」「クワルテットの第2番を書きたい」「お能のような交響曲を書きたい」「巡礼の続きを書きたい」等々、次から次へと想いが溢れ出てこられた。「ゲッセマネの夜を交響曲第3番にしたいと思うがどう思う」ということも何度も聞かれたことがあった。

虎ノ門病院が我が家のようになられ、看護婦さんの中でもとても人気のおありになり「おかえりなさい」「また来たよ」などの会話も交わされていたが、しかしながらこの入退院の間隔が少しずつ狭まって来ていることも厳しい現実であった。

「夢か！天使がいっぱい舞っていた」「この部屋に霊がいっぱいいるのが見えないか」「矢代も武満も池野も黛さんもいなくなったのか」「死ぬのはちっとも怖くない、すぐそこに行くようなもんだ」等と言われたかと思うと、「おれはオペラのために芸大を辞めたのに、なんで裕は芸高を辞めないんだ」「裕のことを一番怒ったことは何か憶えているか！」等と厳しく詰問されたこともあった。

6月にはクアトロ・ピアチェーリの弦楽四重奏曲の練習を狛江でお聴きになられた。本番当日銀座の王子ホールまで行かれながらも酸素吸入器の具合が悪く、聴けずに救急車で虎ノ門病院に入院されたこともあった。

7月5日には再び倒れられ危篤になられた。血液中の二酸化炭素の量は146トールまで上がり、「健常の人より二酸化炭素が高い状態で生活しておられる先生だからこそ生きておられるので、普通の方だともう亡くなってもおかしくありません」との救急医の先生の話であった。

しかしながら翌日には意識が戻られ「またこんなになってしまった」と話された時は、嬉しい驚きであった。再び不死鳥のようにお元気になられ退院され、ピアノの金澤希伊子

先生とともに好物のうなぎを楽しく食べさせていただき、師は1人前全部を完食されたこともあった。

師はどんどん澄んでかれるように思えた。「海や山、木や石にも神がいるんだね」「また海外を旅したいなあ」「天上の音楽が聴こえる」等と透き通るような声で話されることがあった。

もう何度目の入院であっただろうか？治療が終わりお元気になられ、退院が8月6日に決まった。前日の5日、私の母が具合が悪かったので「ちょっと京都に帰って来ますが、また7日に来ます」と言う。「お母さん、お大事にね」と気遣ってくださった。

8月6日午後2時30分過ぎ長男の祐介君から「親父が危篤になった」と連絡が入る。えっ！今日退院のはずでは、またなんとか回復されないか！思いが錯乱している中、「親父が死んだ」という電話が再び入った。暑い真っ青に晴れた日であった。

午前中松村家に容態が危ないから来てくださいとの連絡があり、久寿美夫人が病室に入られると師は寝ておられ、枕元には血が飛び散った後があったとのこと。ばたばたと医師や看護婦が駆けつけてきて外に出てくださいと言われて外にいます、お亡くなりになりました、と言われたとのこと。

霊安室の師は、生涯を作曲に捧げ豊饒で壮絶なる作品を数々残されてきた大作曲家としては、またこの1年余りの過酷な闘病生活を何度も乗り越えられてこられた奇跡のような松村先生としては、あまりにもあまりにもあっけなく白布に覆われて横たわっておられた。

師は目に見えないあまりにも大きなとてつもない何物かを残して逝かれた。お前たちどうする？と問いかけながら。

2011年8月6日

高橋 裕